潮　流

「トランプ大統領 2020 年再選」の蓋然性

代表取締役専務　柳田　茂

2018 年は世界中で様々な出来事があったが、代表する人物を一人挙げるとすれば、やはり米国のトランプ大統領となるであろう。2017 年 1 月に自国第一主義を掲げて登場したトランプ大統領は、2 年目の 18 年もイラン核合意からの離脱、在イスラエル大使館のエルサレム移転、電撃的な米朝首脳会談を実現させる一方で中国と激しい覇権争いを開始し、カナダ・メキシコには NAFTA 再交渉を飲ませるなど、まさに思うが儘に世界を揺さぶった。

このトランプ大統領の 2 年間の政権運営に米国民が審判を下したのが、11 月 6 日に行われた中間選挙である。同選挙で大統領の与党共和党は、上院で過半数を維持したものの、下院では 35 議席減らして過半数に届かなかった。この結果を一言で評価するのは難しいが、もともと米国の中間選挙は大統領選挙からの振り子現象で与党が敗れるケースが多く、事前の世論調査では民主党が相当先行していたことを考えると、共和党が追い上げた結果であったのは間違いない。そして、追上げの原動力がトランプ大統領本人にあったのも否定しようのない事実であろう。

今回の選挙戦で、トランプ大統領は現職大統領としては過去に例を見ない頻度で全国遊説を行い、移民政策に焦点を絞って激しい言葉で民主党を攻撃し、自らの支持基盤である白人保守層の票の掘り起こしを行った。30 人を超える共和党ベテラン議員が引退するなか、代わりに立った新人議員の多くは、異口同音に「自国第一・反移民」を掲げ、「ミニ・トランプ」と呼ばれるのも厭わず大統領と一体となった選挙戦を繰り広げた。トランプ大統領が特に力を入れたのが激戦州の上院選と知事選で、最終盤の 4 日間に 8 つの州に応援に入り、強力なテコ入れを行った。

こうした選挙戦の結果、共和党は激戦州のフロリダ、テネシー、ミズーリ、インディアナ等の上院選や知事選で勝ち、上院と州知事の過半数を確保した。国家の主要人事と条約承認そして弾劾裁判の権限を握っている上院を押さえただけでなく、州単位で戦われる大統領選挙に強い影響力を与える州知事と上院議員に自らに従う人物を何人も送りこむことに成功したトランプ大統領にとって、今回の中間選挙は自身の再選戦略に大きな手応えを得たものであったと言えよう。

事実、今回の中間選挙を通じて、リンカーン以来の伝統ある共和党は、これまで本流と目されてきたベテラン政治家の多くが去るか大統領の軍門に下り、多様性を許容する保守政党からトランピズム一色の政党に変質してしまった。アキレス腱であるロシア疑惑が深刻な事態にならない限り、次回大統領選挙はトランプ支持でまとまるであろう。

問題は対する民主党である。今回の中間選挙で民主党は、女性や若者の票を集めて下院を制したものの、「反トランプ」以外に求心力となるビジョンや具体的政策がなく、支持層も左派が台頭した一方で中道が離れる分裂状態に陥ってしまった。1 年 10 ヶ月後に迫った大統領選挙までに、この状態を乗り越えて広く支持層を結集し、国民を再び統合に導く明確なメッセージを打ち出せるか、民主党ひいては米国の民主主義の真価が問われている。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます